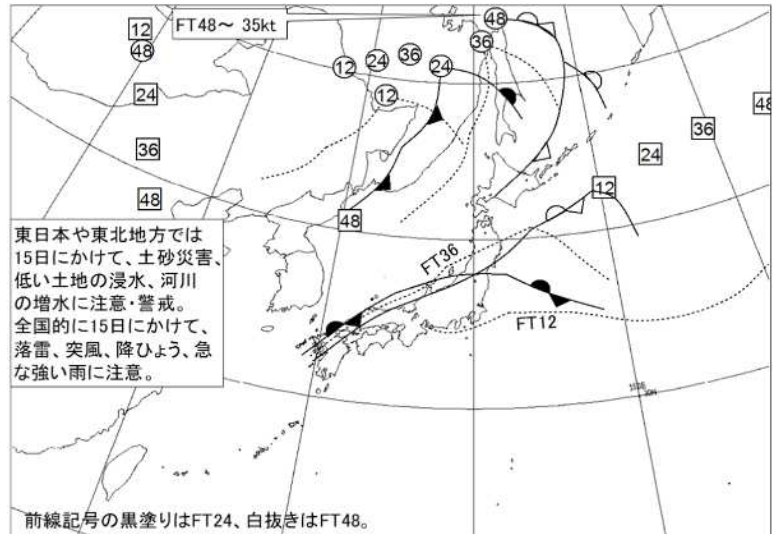


1. 実況上の着目点

- ① 中国東北区に南下してきた寒冷渦の南東側で雲域がまとまり、アムール川中流で低気圧が発達傾向。また、強風軸が強化され500hPa5820～5880mに沿って雲バンドが大陸から日本海にかけて濃密化。
- ② 500hPa5940m以上の亜熱帯高気圧が北緯32度付近にあり、日本のはるか東から華中にかけて東西広く高気圧性循環。対流雲の影響を及ぼしていた気圧の谷は東シナ海に移って南西諸島も雲が減少。北緯20度付近の日本の南を上層寒冷低気圧が西進し、小笠原近海から大東島地方近海にかけて対流雲発達域。発雷も検知。
- ③ 前線は東日本太平洋側の相当温位集中帯の南端、地上露点温度24℃付近に解析しているが上空との対応が薄れて、不活発な下層雲列に変化。暖湿気による可降水量極大域は本州南岸にあるが、高気圧の西側で南風が卓越し北上傾向。沿岸地形等による収束を要因とした局地的な発達に注意。



主要じょう乱解説図

2. 主要じょう乱の予想根拠と防災事項を含む解説上の留意点

- ① 1項①の低気圧は14日にかけて寒冷渦直下に入るまで発達しながら北東に進み、14日にはサハリン北部に達し、寒冷前線が北海道を通過する。低気圧に向かう下層暖湿気と上空の寒気の影響で前線付近は大気の状態が不安定となる。北海道地方では14日は、落雷、突風、降ひょうに注意。
- ② 1項②の上層寒冷低気圧は14日には沖縄の南から南西諸島に達し、地上でも南西諸島は14日にかけて東から気圧の谷に入る。大気の状態が不安定となり、次々と発生し雷を伴って移動する対流雲の影響を受ける。南西諸島では15日にかけて、落雷、突風、急な強い雨に注意。
- ③ 1項③の水蒸気の極大域は、13日夜には九州北部～北陸沿岸～東北地方まで北上。1項②の雲バンドとも結びついて降水域が広がり、同地方に前線がのびるようになる。前線は、2項①の低気圧や前線を含む気圧の谷の南側では北上、その後は南下傾向となるが、スケールの大きなトラフが15日午後にも日本海～東シナ海に残るため、前線の南下はゆっくり。14日から15日にかけては、2項②の気圧の谷の東側を南海上から北上する新たな下層暖湿気に加わるとともに、トラフや上層寒冷低気圧の接近に伴い上空寒気の影響が強まることから、前線付近から南側で広く大気の状態が不安定となる。14日にかけては前線付近、15日には太平洋側を含めて所々で雷を伴って激しい雨が降り大雨となる所がある。東日本と東北地方では15日にかけて、土砂災害、低い土地の浸水、河川の増水に注意・警戒。西日本～東北地方では15日にかけて、落雷、突風、降ひょう、急な強い雨に注意。これまでの大雨により地盤の緩んでいる地域では通常よりも少ない雨量で土砂災害の危険度が高まりやすいことに留意。

3. 数値予報資料解釈上の留意点 総観場はGSMを基本、量的予想や降水分布はMSMやLFMも参考。

4. 防災関連事項【量的予報等】 ①雨量(06時から24時間):東北・北陸100mm。②波浪(明日まで):高い所(3m以上)はない。

5. 全般気象解説情報発表の有無 発表の予定はない。